

ドイツ、エルランゲン大学での研究会参加記¹
—ロシアのカエルが考えたこと—

バイエルンは、私にとってカエルの国である。街中を歩いていると、おとぎ話「かえるの王さま」にちなんだ、冠をかぶったカエルとショーウィンドー越しに目が合うことしばしば。ちなみにロシアではカエルは言語的に女性名詞で、お姫様である。ドイツでもロシアでも、カエルは悪い魔法をかけられてしまった王族なのだが、お互いにそのことを知っている人は実はあまり多くない。それを、わが国の箴言を借りて「井の中の蛙」と言っただけは、怒られるだろう。なにしろ、相互に行き来しつつ、共通の研究プロジェクトを進めている人々がいるのだから。

ドイツはニュルンベルグ近郊の大学都市、エルランゲンと、私が現在籍を置いているウラジーミルは姉妹都市であり、この理由から、双方の大学の宗教学研究室では3年ほど前からかなり活発な共同研究が始まった。エルランゲンのフリードリヒ・アレクサンドル大学からは、宗教社会学の専門家でロシア・ペテロザヴォーツク出身のジダーノフ氏と、講座長でインド研究者のネーリング教授がこの共同研究をリードし、ウラジーミル大学では、宗教哲学のアリーニン教授が中心である。定期的に行われる研究会には、両国の他の都市の研究者にも呼び掛けて、参加者を広く募ることが慣例となっている。私も声をかけていただいて、この研究会に参加した折、ヒンドゥーが専門だというネーリング教授との四方山話でスラ研の新学術領域の話をもと漏らしたところ、非常に興味を持っていただき、とりあえずのところ2010年11月の学会に第6班から研究者を呼べないだろうか、という話になったのだった。

その後、ジダーノフ氏の2010年度の夏シンポへの参加などの経緯があつて、大東文化大の井上貴子先生にご参加頂くことができた。終わってみると、研究会そのものよりも、井上先生の指摘から得られたことの方が多きように思う。ひとつひとつの報告の後に、質疑応答や休み時間に井上先生の口から飛び出す辛口のコメントは、実際、大変面白く勉強になった。このエッセイを書くことになったきっかけも、井上先生から刺激を受けた部分が大い。改めて感謝申し上げたい。

今回の研究会のテーマは「Religion and Media: Transcultural Perspective」（2010年11月2-3日、フリードリヒ・アレクサンドル大学）であった。この「宗教とメディア」というテーマ、最近とても流行っているようだ。5月に参加した、モスクワ宗教学協会（Московское религиоведческое общество）主催のシンポジウムも「宗教とメディア」というテーマだった。2度も同じテーマが別団体で企画されれば、当然、気になってくる。自分

¹ 本稿は、日露青年交流センター「2009年度若手研究者等フェローシップ」の助成による研究成果の一部である。

の研究を力づくで研究会のテーマに近付けたものの、そもそもこのテーマでシンポジウムを行わせる動因や最終的な目的は何なのか、人と人を解するすべての媒体を「メディア」として考えれば、なんでも語れてしまうのではないか、という疑問は始終頭の底に淀んでいた。結論から言えば、今回の研究会では、全体として共通理解を欠いた玉石混交の報告の寄せ集め、という印象が拭いがたい。報告は全部で16本、内8本がドイツ、6本がロシア、2本が日本に基盤を置く研究者によるものである。これらの中で言及された「メディア」は、「広告」、「音楽」、「言語」、「テキスト」、「写真」、「ポスター」、「映画」、「雑誌」、「博物館」と幅広い。ロシア側の研究者が事例研究をもとにした報告を中心とするとすれば、ドイツの研究者は、「理論」を中心としていたといえるだろうか。ただし、この「理論」が目指すものが何なのか、勉強不足の私にはいまいちわからなかった。井上先生は、ここで「比較の枠組みが古い」「なぜ今、西欧的な視点に再び立って何でもかんでも分類する必要があるのか」という趣旨の指摘を再三なされていたように思う。

ロシアに帰っても、腑に落ちかねるところがいろいろあったので、研究会でしばしば引用されていた諸文献についてインターネット検索をかけてみたところ、この疑問に真正面からぶつかるような論文に出合った **Richard Fox, Religion, Media and Cultural Studies** (論集に掲載される予定のようだが、論集自体はネット上では見つけれなかった)

(<http://divinity.uchicago.edu/martycenter/publications/webforum/052009/Religion.%20Media%20and%20Cultural%20Studies%20%28MMC%29-1.pdf>)。この論文は、私の中でもややと淀んでいた疑問に対し、ひとつの痛快な切り口を示してくれた。著者フォックスは、「宗教とメディア」に関する研究が近年盛んに議論されていることを、シンポジウムやモノログ、雑誌の特集を数え上げつつ指摘し、テーマ自体が、「メディア」や「宗教」を欧米中心的に捉える傾向にあることを揶揄している。フォックスによれば、「宗教とメディア」学者が概ね想定している「メディア」理論は、カルチュラル・スタディーズのコミュニケーション理論、具体的にはスチュアート・ホルの「エンコーディング/デコーディング」の延長線上にある。この理論が戦後イギリス社会を中心に発展した背景を脱しきれていないこと、「メディア」が伝えるテキストが固定的に前提されていることを著者は批判する。言い換えればこの場合、メディアが伝えるところの「宗教」はあらかじめ固定的なものとして想定されている。結果として「宗教とメディア」の研究の多くが、「出発点においてすでに分かっていることしか明らかにしない」と、この論文は指摘している。

今回の研究会との兼ね合いから言えば、「宗教とメディア」について、トランスカルチュラルな立場から論じるという試み自体は面白いものだと思う。だが、その実現は簡単ではなさそうだ。第一に、フォックスが指摘しているように、既存の「宗教とメディア」研究の理論的枠組みが主要なターゲットとしているのは、世俗化の進行した西欧的空間と、そこにおけるサブカルチャーの中で表象される宗教や呪術的世界である。さらに、ロシア、中国、インドといったそれとは異なる空間における個別のケーススタディでは、個々の文

化圏における差異（メディアの在り方、世俗化の度合いなど）が重要な意味をもつ。そこで異なる地域を論じるためには、どのような基盤が必要になってくるのか。

それを見出せていない結果として、第二に、ほとんどすべての論者が、ある文化圏のメディアによって生産され発信された宗教的イメージやアイコンが、同じ文化圏でディコーディングされるという範囲から問いを広げることをしていない。オープニング・セッションでの報告は、現代の宗教が「文化市場」の中に位置し、選択可能なアイデンティティとして消費される、「banal religion」となっている、という趣旨であった。ここで例として挙げられた、商品広告に用いられる「宗教」のモチーフは、グローバル企業から発信されたものであっても、キリスト教に基づいているから、聖書の知識がなければ適切に「ディコーディング」されない。これがどこへ向けて発信されたものなのか、という問いは宙ぶらりんなまま議論が進んでいったことを、今になって遺憾に思う。例えば、同じキリスト教社会でも、旧共産圏、とりわけロシアでは、聖書の人物を公共の空間でパロディ化して見せることには、極度の慎重さを要する。インドや中国では、また違う支配的な「読み方」があるのだろう。メディアに埋め込まれたテキストには、最初から固定した前提など存在せず、すべてがその時と場所によって異なり、多方向から向けられるイデオロギーを反映しつつ変化していく。グローバル社会だからこそ文化圏の違いが強く意識される場の一つとして、メディアがあるのかもしれない。比較の問題は、「宗教とメディア」に限らず、新学術領域の研究が続く限り、中心的なものであり続けるだろう。

比較の対象として、われわれロシア研究者にインドと中国の専門家の仲間がいることは、実は大変ありがたいことなのだと私を痛感させられたのも、実は7月の夏シンポを踏まえたいえでの今回の研究会である。優れたものはすべて西にある、という考え方は、いまだにロシアのインテリ層に根強い。私の知っているロシアの研究者の目は、圧倒的に西側を向いている。ヨーロッパへ出て「西側」の理論を学ぼう！という姿勢は、ロシアの若い有能な宗教学者にしばしばみられる。ウラジーミルとエルランゲンの共同研究もその延長線上にあることは間違いない。しかしそれは、地方よりもモスクワ、モスクワよりもヨーロッパ、という階段を上がった上にたどり着く「西欧中心主義」への回帰に過ぎない、結局古い枠組みから出られていないのかもしれない。日本で行われたロシア・中国・インドの比較とドイツで行われたその試みを比較してみて、そのことを改めて考えさせられた。

ところでインドネシアやタイでは、哀れなカエルはヤシガラ椀に閉じ込められて出られなくなっているらしい（ベネディクト・アンダーソン（加藤剛訳）『ヤシガラ椀の外へ』、NTT出版、2009年）。アンダーソンは奇しくも、椀の中に閉じ込められたカエルを「独りよがりの地方気質」にたとえているが、私たちががはまり込んでいる椀は、もしかしたらマトリョーシカ状になっているのかもしれない。ロシアの場合なら、地方の椀をでるとより大きなモスクワ椀が、モスクワ椀を出るとさらに大きなヨーロッパ椀がある、といった風

に。いずれにせよ、自分が今いる腕の中から這い出すためには、未知の学術的分野や文化圏を知るしかない。今回の研究会は、「宗教とメディア」から発してカルチュラル・スタディーズのメディア論をもう一度捉え直すきっかけを与えてくれたし、ロシアの学会と「西欧中心主義」という問題に目を向けさせてくれた、という意味で意義あるものだった。沼の中で冠をかぶったまま、毬なり矢なりが落っこちてきて、人間に戻れる日を気長に待っている場合ではないようだ。